

スチュワードシップ月間の第3週を迎えました。私たちはこれまで、時間のスチュワードシップ、からだのスチュワードシップについて学んできました。これまでの学びの中で、時間を大事にするということは、1分1秒をも無駄にしないというような効率性・生産性を高めるあり方ではなく、神の造り給うた世界と自然の時間に思いを馳せながら、神様との交わりの時、すなわち、聖書を読んだり祈ったり隣人に仕えたりする時間を大事に生きることであると学びました。また、からだを大事にするということは、神様から与えられた命や肉体を大切にすることであり、それは自分の体や命だけではなく、この世のあらゆる人の命と体とを大切にすることでした。私たちの世界は、体の弱い人や生活がうまくできない人たちが生きていくのにとっても困難が多い社会ですが、特に生活の困難な人たちの命と体が大切にされる社会こそ、神様が望まれる世界なのです。自分の体や命が大切にされるためには、他の人たちの命や体も大切にされなければなりません。今この瞬間にも、世界中で戦争によって脅かされている命があり、食べる物が無くて弱っている体があります。また自然災害が頻繁に起こる中、人間だけではなく世界中の動植物も痛んでいます。忘れられがちなことですが、大震災や大規模火災の被害で死んでしまったのは人間だけではなく、多くの動物たち、植物たち、この世界全体が、人間による自然破壊・環境破壊の犠牲となっているのです。自分たちだけの命と体が守られても、それは命と体を本当に大切にしていることにはなりません。私たちは、世界中の命と体が守られるように、今まさに私たちのなすべきことをキリストに従いながら行わなければならないのです。

さて、スチュワードシップの学びの第3週目を迎えた今日は、神様からいただいた賜物を豊かに用いるためにはどうすればよいのか、ご一緒に考えてみたいと思います。

今日の聖書の箇所、コリントの信徒への手紙一12章1節には、賜物という言葉の前に「靈的な」という言葉が付いています。「靈的な賜物」。賜物にも靈的なものとそうでないものがあることを示唆しているようです。それでは、靈的な賜物とはどのようなものなのでしょうか。聖書を読んでいくと、3節にこんな言葉が出てきます。

【ここであなたがたに言っておきたい。神の靈によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖靈によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。】ここでパウロは、「イエスは主である」という信仰告白は聖靈によらなければできない、と語っています。みなさんは毎日の生活の中で、「イエスは主である」という信仰告白をどのくらい行っているのでしょうか。この信仰告白こそ、靈的な賜物の働きなのです。

私たち人間は神様によって造られた存在です。ところが、神様より造られた人間が造り主である神様を忘れ、神様の存在を無くしてしまいました。神無き世界は、命を傷つけ、命を奪い、命を破壊してしまいます。戦争で多くの人の命が奪われているだけでなく、毎日起こる悲惨な事件や自然災害によって、どれだけ多くの命が傷つけられているのでしょうか。神様がくださった命を産み出す創造の秩序が、それを管理するはずの人間によって破壊されてしまった。神様の造り給うたこの美しい世界は、今うめき声を上げています。そのような世界にあって、この世界をだめにしてしまった人間の罪を赦すために、自ら犠牲の小羊となって十字架に架かれたイエス様を「イエスは主である」と告白できるのは、聖靈によらなければならない。人間の知恵や力では、とうていできないのです。

霊的な賜物というときに、もう一つ大事なことがあります。7節にこう記されています。【一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。】 全体の益。「イエスは主である」という信仰の告白は、神様とその人との個人的な関わりの中で起こされてくる霊的な賜物ですが、個人に与えられた賜物は、しかしながら、全体の益のためでなければなりません。これが霊的な賜物の働きである、と聖書は語るのです。

全体の益。そのことをもっと分かりやすく言い換えた言葉が26節に出てきます。【一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。】 苦しい思いをしている人が、その苦しみを自分一人で抱え込んで悩むのではなく、みんなで共に苦しむ。苦しみを抱えた人をそのまま放っておかない。これが全体の益です。そして全体が互いに助け合い、慰め合い、励まし合って、そうやって調和のとれた一つの体が立て上げられていく。これこそが霊的な賜物の働きなのです。

それでは、ここでいう「全体」というのはいったい何を現しているのでしょうか。狭い意味では、信仰共同体、すなわち教会のことを指します。私たち教会は、教会に属するそれぞれのメンバーの苦しみや喜びを共に分かち合うのです。しかし、「全体」ということをもっと広げて考えるなら、キリストを信じたすべてのクリスチャンとなるのでしょうか。けれども、キリストの十字架は信じる者のためだけではなく、信じない者のためにもあったのですから、そう考えますと「全体」とは人類全体と考えることもできます。けれどもそれは、人間だけではなく神様が造り給うたすべてのもの、動植物や自然も含めたすべての被造物全体まで広げて考えることもできます。そうしますと、この世界のあらゆる被造物の痛みや苦しみを自分の痛みとして感じるができること。これもまた霊的な賜物の働きと言えるのではないのでしょうか。

私たちは、この霊的な賜物を熱心に追い求めて、自分たちの働きにするようにと勧められています。神様から託されたこの世界にあって、この世界全体の益となるために働くことが大切なのです。いやいや、そんなこと言われても、世界のために働くなんて、そんな大それたことととてもできません。そんなふうに思われるのでしょうか。でも、私たちには、この世界のために覚えて祈ることができます。ぜひ、この世界を覚えてお祈りしていただきたいのです。世界の片隅で苦しみ痛んでいる命のために、地球の裏側で悲しんでいる命のために、ぜひ覚えてお祈りしていただきたいのです。それが霊的な賜物の働きなのです。

ではこの霊的な賜物を、私たちはどのように生かしたらよいのでしょうか。最初に見ましたように、霊的な賜物によって私たちは次の2つのことができます。「イエスは主である」と告白する働きと、全体の益となるために自分の賜物を用いること。これはすべての人に与えられた霊的な賜物の働きです。私たちはどんな人であろうとも、いつでもどこでも、イエスは主であると告白し、証することができます。これが霊的な賜物の働きです。また私たちは、他の人たちの痛みや苦しみを、自分の痛みや苦しみとして覚えることができ、そのために祈ることができます。世界の人々のために、今も戦火の中で苦しんでいる人たちのために、自然災害に遭い、食べる物がなくて苦しんでいる人たちのために、祈ることができます。そして祈りはより具体的な行動へと私たちを導きます。実際に戦争のために苦しんでいる人たちのために、実際に飢餓のために苦しんでいる人たちのために、私たちは実際の行動をもって支えていくことができます。そして私たちは、もっと具体的な苦しみや痛みを抱えている人のために、もっと具体的な必要を覚えている人たちのために祈ることができます。そうです。私たちのより身近な人たちのために、私たちはこの神戸西教会の教会員のために、もっともっと具体的に祈ることができるのです。

以前、私が牧師になる前に家族で行っていた横浜戸塚バプテスト教会に、当時、Tさんというご高齢のご婦人がおられました。Tさんは毎日、教会員の一人一人の名前を覚えて3時間ほどお祈りをされておられました。あるとき、教会の女性会で泊まりがけの修養会が行われ、そのTさんと相部屋になった方がこんなことを話してくださいました。朝4時頃ぶつぶつという声が出て目を覚ますと、Tさんが祈っておられました。ああ、祈っておられるなあと思って彼女は再び寝てしまい、次に朝5時半に起きた時、Tさんはまだ祈っていました。そこで彼女はTさんにこう尋ねました。「1時間半も祈っておられたのですか」。すると、こんな返事が返ってきたそうです。「今日は外で泊まったので、いつもの半分しか祈れませんでした」。当時、60名ほどいた教会員一人一人の名前を挙げて、その人の必要を覚えて祈るので、3時間くらい祈らないと足りないのだと言っておられました。

また、祈りはその人を行動へと駆り立てます。その同じ横浜戸塚バプテスト教会での出来事ですが、私たち夫婦は二人一緒に礼拝を休んだことがありませんでした。どちらか一人は必ず礼拝に出席していたのですが、ある時、何かの用事で二人一緒に教会を休むことになりました。すると、その週のうちにあるご高齢の壮年の教会員の方からお葉書をいただきました。この方は当時、80才を超えておられたのですが、葉書一面に細かい字でびっしりと、その週の説教をまとめたものが書かれていました。とても詳しく、細かい字で書かれていました。その方はそうやって、礼拝を休んだ人へ自筆で葉書を書いておられたのです。教会で決められた働きではなく、ご自分で自発的に行っておられた働きでした。私たちはそれまで二人一緒に休むことがなかったので、その方がそんなお働きをされていることすら知らなかったのです。

私たちは神様から霊的な賜物を賜っています。すべての人が賜っています。それは、2つの具体的な働きをするために備えられたものです。一つは、「イエスは主である」と告白すること。もう一つは、全体の益となるために自分の賜物を用いること。すべての人が神様からこの霊的な賜物を無条件で賜っています。なぜでしょうか。私たちは、キリストの十字架によって神様から無条件の救いを受けています。神様からの無条件の救いをいただいている私たちは、神様からの救いを受けるのにふさわしい者となるように、神様によって造り替えられていくのです。地位が人を育てていくのと同じように、救いを受けた者がその救いを受けるのにふさわしい者へと造り替えられていく。神様の救いを受けるのにふさわしい者となるように、私たちには霊的な賜物が与えられているのです。

「イエスは主である」と告白しつつ、全体の益となるように、一人一人が自分に与えられたそれぞれの賜物を出し合っていくこと。そのように願い、精いっぱいものを献げて、互いに支えあっていくこと。それが「霊的な賜物」なのです。

最後に、ペトロの手紙一の4章7節から11節までを読んで終わります。

【万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。不平を言わずにもてなし合いなさい。あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕する人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力とが、世々限りなく神にありますように、アーメン。】
お祈りしましょう。